

勘定吟味役・設楽八三郎の周辺

倉田純一

安政二(一八五五)年五月二五日、設楽八三郎は海防掛勘定吟味役になる。

「大日本古文書・幕末外国関係文書」において、安政四(一八五七)年二月二八日二丸留守居に転任するまで、その関係する書類は四通に上る。多くは「海防掛勘定奉行并同吟味役上申書」で「評議仕申上候書付」である。連名の当事者を列挙すれば左記の通り。

松平河内守・川路左衛門尉・水野筑後守・塚越藤助・中村為弥
村垣與三郎・勝田次郎・土岐撰津守

『寛政譜以降旗本家百科事典』(以降『旗本家事典』)から略歴を記すると、

① 松平河内守

松平河内守近直(大給松平) 家禄二千石

天保十四年八月二十六日 勘定奉行勝手方

安政四年五月二十二日 留守居次席

② 川路左衛門尉

川路弥吉聖謨 家禄五百石

嘉永五年九月十日 勘定奉行公事方

安政六年五月六日 西丸留守居

③ 水野筑後守

水野甲子次郎忠徳 家禄五百石

安政元年十二月二十四日 勘定奉行勝手掛

安政四年四月十五日 長崎奉行兼帯

安政四年五月廿日 長崎表御用 十一月十一日帰府

④ 安政四年十二月三日

田安家家老

塚越藤助

百三十俵

嘉永四年八月八日

勘定吟味役

安政六年四月二十二日

勘定奉行同格勤候内五百俵

⑤ 中村為弥

中村為弥時萬

家禄二百俵

天保七年十二月二十九日

勘定吟味方改役並

天保十四年?月二十一日

勘定吟味方改役

嘉永四年八月十八日

勘定組頭

安政二年五月二十四日

勘定吟味役

安政四年四月二十七日

下田奉行

⑥ 村垣與三郎

村垣與三郎範正

家禄五百石

嘉永七年一月十四日

勘定吟味役海防掛

安政三年七月二十八日

箱館奉行

⑦ 勝田次郎

勝田次郎充

家禄二百俵

嘉永七年十一月二十四日

勘定吟味役

万延元年九月七日

箱館奉行

⑧ 土岐撰津守

土岐綱五郎朝昌

家禄七千石

嘉永七年六月四日

浦賀奉行

安政四年二月九日

書院番頭再役

安政四年七月二十四日

勘定奉行

安政六年三月九日
以上となる。

駿府城代

木村勘助の「幕府名士小伝」(『旧幕府』所収)によれば、

河内守松平近直 初め四郎と称す、天保十五年目附より勘定奉行に任ず、此時より海防の議漸く感んに起り、火技の操練砲台の築造等専らつとめたりしが、近直奮て此事に任じ自から江川英龍の門に入て率先奨励なせしかば、海内靡然として響應し是より西洋砲術大進歩するに至れりと云、此人蟄直にして能く事務に勉勵し、老練の才あり、深く阿部執政に信用せられ、久しく理財の任に当て内外の事大に尽す所ありしといへり。

左衛門尉川路聖謨初め弥吉と称す、人と為り快豁磊落少きより、文武の技を好み、粗衣糲食書生を以て自から居れり、嘉永五年勘定奉行に任じ旨を奉じ、筒井政憲と共に長崎に赴き、露国使節と論談し屢其論鋒を挫けりといへり、此人好て四方奇傑の士に交り廣く眼を天下の経綸に注ぐ、志操遠大當時の有司中稀に見る所なり、然れ共諤々の言動もすれは、俗輩の忌む処となり、久しく其位を保つこと能はず、戊辰の変憂憤して自尽す以て其平生を想ふ可し。

筑後守水野忠徳 初め甲子次郎と称す、性剛毅峭 諸要職を経て安政元年勘定奉行に任じ、長崎奉行を兼摂す、同五年始て外国奉行に任ず、毎に外国人と会見事を議するに常に抗論し毫も屈下せず、外人皆これを憚りて共に対談すること能はずと云ふに至れり、政府已むなく陽にこれを擯けて陰に幕中に延ひて其謀議に参せしむ、文久元年旨を奉りて小笠原諸島を巡視し、滞留外人を説諭して皆我が約束を奉ぜしむ、此の他此人の偉績極めて少からず、某末の一人傑と称すべし、しかれども自信すること甚厚く外人に向て彼我の情勢を審にせず、一途其意見を主張して動かず、往々執拗の諂を免れざることあり、戊辰の変、憂悶疾を成し讒語して吾今某所に使命を奉ず云て死せりと云。

淡路守村垣範正 初め與三郎と称す、安政三年函館奉行に任じ、

外国奉行を兼摂す、機敏にして吏務に練達す、萬延元年新見正興(豊前守と称す)と共に合衆国に使し彼我の條約を交換す、是れ我邦はしめて外国と條約を換ふる使節の嚆矢なり。

出羽守中村時萬 始め為弥と称す、容貌短少短狐の如しといへども其中剛硬狃す可らざるの氣象あり、安政三年下田奉行に任じ、米国公使入京の事を議し大に尽す所あり、此入また下僚に在りて為弥と称せしとき筒井政憲、川路聖謨に従て長崎に赴き、露国使節と往来商議せしが我より使節に書を贈ることありて、時萬これを齎して露国軍艦に到りしに使節其文意の己れに不利なるを知り拒んで受けず、時萬百方これを論ずれとも聴かず、然らば我も亦使命を奉しこの書簡を持ち來たるに受けざれば、吾寸歩も此艦を退くまじ、此艦の到る処に従ひ行き其都城に至り直ちに之を国帝に獻せんのみと、断然決心の氣あるを見て使節大に困却し、遂に其書を受領せりと、此事阿部執政の聞く所となりて、其年勘定吟味役に進み、又下田奉行に拔擢せられたりといへり。

とあつて、當時の史料として参考になる。

この四三通の文書のほか、田中正弘『近代日本と幕末外交文書編纂の研究』によれば左の人々の留記を参考にしていたらしい。

合原猪三郎・伊佐新次郎・一色邦之輔・大沢仁十郎・大久保忠寛・江川太郎左衛門・大橋宥之助・小野友五郎・糟屋鎗之助・伊藤次郎助・菊池大助・佐々倉桐太郎・新見正興・瀧村小太郎・日下部官之丞・中島三郎助・名村五八郎・永持亨次郎・中台信太郎・中村時萬・日高圭三郎・福田作太郎・香山栄左衛門・高麗環・村垣範正・向山黄邨・水野甲子次郎等々すべて幕臣である。

この四三通のうち大部分は「堀田正陸外国掛中書類」からの写しで、ほかに水野忠徳留記・福田作太郎筆記・大橋宥之助筆記・日下部官之丞留記・諏訪氏雜記・菊池隆吉留記・合原猪三郎筆記等の写しである。

福田作太郎は箱館奉行支配組頭・神奈川奉行支配組頭、大橋宥之

助は箱館奉行支配調役下役、日下部官之丞は勘定・勘定組頭、菊池隆吉は外国奉行、合原猪三郎は下田奉行・外国奉行・神奈川奉行の各支配調役及び神奈川奉行並を歴任(田中正弘前掲書)。

何通か伊勢守へ右筆を通じて上げ下げが行なわれ、竹村七左衛門・早川庄次郎・立田録助・原弥十郎の四名が記録されている。

竹村七左衛門は安政三(一八五六)年八月に亡くなり、早川庄次郎は、

天保九戌 乙 小普請組後藤佐渡守支配 早川 庄次郎

と「昌平学科名録」にあり、立田録助の子は塚越藤助の養子になり、また父は天保一四(一八四三)年より安政二(一八五五)年一二月まで勘定吟味役であった。原弥十郎は坂口筑母「浅野梅堂」によれば、号を秋徑あるいは柳圃といい、官学派詩人たちと付合があったらしい。

勝田次郎の父は勝田弥十郎(半斎)といい「続日本随筆大成」に「貧政」が収められている。勝田半斎が文政八年に学問所勤番組頭だった時に中村時萬は同勤番見習として居た。

二

設楽氏は「統群書類従第七輯下系図部七十七大伴系図」によれば、大伴家持の四代孫善男から一〇代俊実の男資時を三州設楽氏の祖とし、弟資隆は三州富永氏の祖としている。「御評定着座次第」応安八(一三七五)年正月一三日条に設楽三郎、永和二(一三七六)年正月八日条に設楽三郎、同四年正月一日条に、設楽伊賀太郎・設楽越中三郎あり。「永享以来御番帳」二番に富永左近将監・富永筑後入道・設楽兵庫助、五番に富永駿河入道・富永兵庫助・富永弥六。「文安年中御番帳」二番に富永孫五郎・富永筑後入道・設楽兵庫助・同平左衛門尉・同次郎左衛門尉・富永左近将監、五番に富永駿河入道・富永修理亮。「長享元年九月十二日常德院殿様江州御動座當時在陣衆着到」二番に富永五郎(伊勢)・設楽三郎、五番に富永

弥六。いづれも足利將軍側近の番衆である。然し乍、「寛政重修諸家譜」(以下「寛政譜」)によれば、設楽氏は出自菅原氏としている。大伴氏・菅原氏の違いを埋める史料はない。

「寛政譜」の設楽氏は、「三河国設楽郡川路城に住せしより設楽を称号とす。」とある。系図は二系統あって、一は「貞次」より始まり五代孫「貞道」が今川義元・氏真に属しという系統、一は「能久」より始まり八王子に住んだ系統。但し後者は前者と違つて八王子以前のことは定かではない。設楽八三郎は「能久」の系統である。能久―能重―能業―能真―能武―光能―能該―能一―能得―能潜(八三郎)という歴代になり、代官を何人かが勤めている。西沢淳男「幕領陣屋と代官支配」データベースによるとこの設楽家系統では計九人が代官になっていて、左のとおりなる。

- 長兵衛能業 ？―一六四七
- 源右衛門能政 一六三一―一六七八
- 権兵衛能真 ？―一六六七
- 太郎兵衛某 一六七八―一六九二
- 孫兵衛能武 一六七七―一七〇〇
- 喜兵衛正秀 一六九〇―一七〇〇
- 勘左衛門能久 一六八八―一七〇〇
- 長兵衛能該 一七四二―一七五三
- 八三郎能潜 一八四三―一八五五

もう一系統は
貞道―貞清――貞代―貞辰―貞成―貞英―貞好―貞周―貞長―
―貞信①―貞時②
① 貞信―貞政―貞興―貞高―貞根―貞猶―貞喬―貞丈
となる。川合重雄によれば、子孫小倉氏の系図では「能久」系統が設楽氏の正統の血筋であるという(『三河地域史研究』二、八号)。「寛政譜」では長三郎貞長の家禄二一五〇石、直之助貞丈一四〇〇石、②貞時の後裔佐源次貞正三〇〇石。小倉氏は貞丈の孫貞皓が小倉と改称したようで系図に戻すと、「能久」に宣政・能業の二子あ

り、宣政・清忠に「貞享年中、江戸二出て奉仕ヲ乞ひ事ならずして去ル。此子孫、武州多摩郡下恩方村農民設楽太右衛門安長、同喜多八ト云。文政年中、八王子同心トナリ。設楽甚蔵、設楽三蔵ト云アリ。是、東三河設楽家ノ正統血統トス。」此後のことは夏目利美「八王子設楽家について」(新城市郷土研究会「郷土」一三五)に詳しい。

市左衛門貞丈には男子四人あり。民之丞貞温・厚次郎篠山金次郎資敬・愿三郎岩瀬修理・寛之丞設楽弾正貞晋。篠山金次郎家禄三八〇石庄右衛門養子、民三郎貞温は放蕩の末廢嫡後を寛之丞が継ぐ。愿三郎は康五郎岩瀬市兵衛忠正の養子家禄八〇〇石。

民三郎貞喬は摂津麻田藩九代藩主青木一貫の次男でその実父は伊予宇和島藩四代藩主伊達村年、その直系四代先は伊達政宗に行着く。つまり岩瀬忠震は伊達政宗の血筋直系八代孫となる。また直之助貞丈は本草を採求、貞喬の実兄は家禄三六〇〇石御側衆佐野義行養子健行、佐野義行は歌人として有名。

設楽八三郎は設楽吉之助能得(家禄一五〇俵)の養子なる。次に八三郎の略歴を示すと

- 天保十三年 奥右筆(江戸幕府役職武鑑編年集成)
 - 天保十四年八月二十一日 奥右筆より御代官
 - 安政二年五月二十四日 勘定吟味役海防掛
 - 安政四年十二月二十八日 二丸留守居
 - 安政五年八月二日 勘定吟味役再役
 - 文久二年三月二十二日 先手過人 学問所御用
 - 五月十三日 先手鉄砲頭
 - 九月六日 卒
- となる。養父設楽吉之助は天保九年まで奥右筆であったことが知られ、以後武鑑には見えない。天保一〇年から一二年の間に致仕か亡くなったかまた家督を譲ったか。この三年間に設楽吉之助から設楽八三郎にかわったとみて差し支えない。
- 設楽八三郎の実家は作事下奉行鈴木八兵衛で八〇俵一人扶持。こ

の記事でゆくと次男になる。「昌平学科名録」(「旧幕府」所収)を参考にすれば

- 享和三亥 乙 御作事下奉行八兵衛倅 鈴木 栄 蔵
- 文政元寅 乙 材木御金奉行八兵衛次男 鈴木 八三郎 (設楽)

◎設楽氏を継いで御代官・御勘定吟味役また御先手になり病死。とあって『旗本家事典』によれば兄惣領栄蔵は以後八兵衛を名乗り三代目を桓四郎としている。代官について言うと

- 古山善吉 文政元年から文政九年
- 古山善一郎 天保十三年から弘化四年
- 勝田次郎 天保十三年から嘉永七年

の三名が歴任している(左の表を参照)。勝田次郎は丁度設楽八三郎と任官時期が重なり、江戸・但馬生野・陸奥川俣・江戸廻を、設楽八三郎は、奥右筆留物方から江戸・摂津大阪二・陸奥川俣と歴任。

「甲子夜話」七十五に「豊原時元七百年忌辰、其遠孫文秋 乞余詩 賦以贈之」とあって左の人々が漢詩を寄せている(七〇〇年忌は文政六年。静山著述時は文政八年。)

- 参議 徳川斉修(水戸徳川斉昭の兄)
- 松山侯 侍従隠岐守 松平定通
- 浜松侯 四品左近将監水野忠邦
- 鯖江侯 下総守 間部詮勝
- 烏山侯 佐渡守 大久保直成
- 飯田侯 大和守 堀 親宝
- 神戸侯 伊予守 本多忠升
- 柳本侯 大和守 織田信陽
- 鳥取支侯長門守隠居 致仕縫殿頭松平定常(松平冠山)
- 岡田侯播磨守長寛嗣子伊東長祥
- 熊本支侯采女正弟 細川利和

御勘定奉行左衛門尉
交代寄合越中守嗣子

遠山景晋 (遠山金四郎景元の父)

御使番

榊原 砥 (榊原月堂・書家)

御使番

花房榮親 (長左衛門・号悠山)

寄合

堀 利堅 (堀小四郎・織部正の父)

寄合

滝川利教 (滝川南谷の男)

御儒者

浅野長孝 (浅野梅堂の父・号錦谷)

奥儒者見習

古賀 (古賀侗庵・小太郎)

御書院番善十郎子

野村 温 (野村篁園)

御側衆豊前守次男

成嶋 讓 (筑山・桓吉)

大番頭丹波守弟

平岩 章

両番

土岐朝茂 (勘定奉行土岐撰津守朝昌か)

学問所勤番組頭

八木 章 (八木補矩の弟四男維章か)

同

泉本明善 (佐渡奉行忠篤の子・誠一)

御代官

勝田 献 (勝田半斎)

前人子

猪飼 傑 (猪飼履堂)

小普請組弦次郎子

古山 礼 (古山善吉)

前人弟

古山 恒 (古山善一郎か)

御金奉行八兵衛子

石川 澄 (次郎作・則正・柳溪)

前人弟

鈴木 洋 (鈴木栄蔵)

御膳所御台所頭

鈴木 潜 (設楽八三郎)

小普請組医師

毛受 武 (毛受貫助)

大学頭

村上 樵 (村上良知か)

前人子

林 衡 (林述斎)

中奥御番

林 就 (述斎長男)

御書物奉行

鳥居忠耀 (鳥居甲斐守・述斎次男)

小普請組一学養子

坂井政謙 (述斎三男)

「森銃三著作集」及び坂口筑母「乙骨耐軒」「浅野梅堂」より詩

人としての活動を見てみると、設楽八三郎は翠巖と号し、野村篁園

門下であったようだ。御書物奉行鈴木岩次郎の息鈴木桃野「無可有

郷」下巻「自述」(随筆百花苑第七卷所収)のうち「此比鬪詩の催

しありて、穆亭、翠巖、秋浪、柳溪、秋帆、拜石、鱗川、練塘、松

陰、一谷予を合せて十一人、関口の龍隱庵に会し、社を結びて詩を作

る。野村博士、玉 老人、崑岡等はミナ評者なり、追々景山、南圃、

裕堂の輩を加へて、此社の盛んなる天下第一と称す。社名を氷雪社

といふ。」

翠巖は設楽八三郎、柳溪は石川澄、秋帆は石川濟、野村博士は篁

園、そして玉屋老人は植木八三郎。また森銃三は「たまたま『漱芳

閣書畫記』を見るに、その三巻軸の部、「清朱山樵漁耕讀圖卷」の

題詩に、小花和櫻墩、岡本花亭、友野霞舟、乙骨耐軒、設楽翠巖、

野村篁園、久貝蓼灣の七家あり。」という。蓼灣は金八郎。

当時昌平饗周りの官学派の詩人たちには、野村篁園・友野霞舟・

乙骨耐軒・古賀侗庵・小花和櫻墩・久貝蓼灣・木村裕堂・鈴木白藤

石川秋帆・石川柳溪等々。

今昌平饗の学科試験の合格者を「昌平学科名録」(旧幕府)所収

から抜き出してみれば、左の通りである。

寛政十二申 乙

小普請組室賀志摩守支配

享和三亥 乙

御作事下奉行

明屋敷番伊賀之者

文政元寅 乙

材木御金奉行

死。

◎設楽氏を継いで御代官・御勘定吟味役また御先手になり病

丈政六末 乙

西丸御書院番佐藤伊予守組

善十郎惣領

平 岩 七之丞

天保四巳 乙

西丸御書院番構田筑後守組 八百橋惣領 小花和銈次郎

◎御徒頭より日光奉行に相成内膳正に任じ隠居。

天保九戌 乙

西丸御小性組本多日向守組

(筑後守)

水野 甲子次郎

◎御目付より御使番、御先手浦賀奉行長崎奉行御勘定奉行

田安殿家老、外国奉行西丸御留守居箱館奉行。

右大將様御書院番浅野岩岐守組与頭又三郎惣領 久貝金八郎

天保十四卯 甲

寄合医師安齋弟

喜多村 哲三

(栗本 安芸守)

◎栗本に養われて瑞見と改める。蝦夷地在任彼地にて組頭

勤方、学問所頭取より御目付、瀬兵衛と改める。

天保十四卯 乙

御小性組大久保彦八郎組

掘省之助(織部正)

御徒頭より御目付箱館奉行に成外国奉行神奈川奉行兼勤中切腹。

御書院番石川大隅守組 市兵衛養子 岩瀬愿三郎(肥後守)

◎御徒頭御目付、外国奉行御作事奉行塾居中病死。

弘化五戌申 甲

御小性組近藤遠江守組

永井岩之丞(主水正)

◎御徒頭御目付、玄蕃頭に任じ外国奉行御軍艦奉行、塾居後京都町奉行大目付。

富士見御宝蔵番河野七太郎組新次耶次男 田辺定輔(太二)

◎厄介にて外国奉行支配調役同組頭 欧羅巴へ行

弘化五戌申 乙

南御番格濱御殿奉行見習

(兵庫頭)

木村 勘助

◎御目付より軍艦奉行撰津守に任ず

嘉永六癸丑、乙

寄 合

中坊 陽之助

◎小納戸より御先手

小普請組 徳永伊予守支配

設楽 彈正

◎徒頭より御目付、開成所頭取より御目付

このうち喜多村哲三・掘省之助・岩瀬愿三郎・中坊陽之助・設楽彈正については次の章で追うことにする。小花和櫻墩は「旗本家事典」によれば、小花和正助正度(兵部・内膳正)父小花和八百吉とある。通詞立石斧次郎(米田桂次郎)はその次男である。

三

「甲子夜話」の著者松浦静山は文政四(一八二二)年十一月一日七日静山邸をお訪れた林述斎の薦めによりその日から書き始めたという。正編七五及び八二から八六の史料から今林述斎の關係を洗って見る。

林述斎は大給松平岩村藩主乘瀛の三男で、幕命により林大学頭の養子になる。永井岩之丞(奥殿藩主乘尹の子)とは縁戚關係に当たる。勘定奉行松平河内守近直も大給松平の出である。岩瀬愿三郎は実父設楽直之助貞丈(一四〇〇石)の三男、母は林述斎の三女純子。岩瀬市兵衛忠正(八〇〇石)の養子となる。述斎の娘は長女経子、赤松左衛門範徳(三〇一五石)の妻、次女繻子、堀廉吉利堅(二五〇〇石)の妻、四女鎌子、諏訪七左衛門頼平(二二〇〇石)の妻、五女穉子、中坊長兵衛広風(四〇〇〇石)の妻。

赤松次郎範忠・堀織部正・岩瀬修理・諏訪求之助・中坊陽之助は従兄弟に当たる。設楽彈正は岩瀬の弟。「隨筆百花苑」第七卷に「仮寝の夢」という隨筆があり著者は諏訪七左衛門頼武である。隠居して若水と云った。頼武→米吉頼功→頼平と続く。岩瀬修理については云うまでもなく、木村勘助曰く、

肥後守岩瀬忠震、初め修理と称す、又伊賀守天賢明敏才学超絶

書画文芸一として妙所に臻らざるはなし、嘉永七年、目付に任じ深く阿部執政に信用せられ、海防外交の事をはじめ凡そ當時の急務に執筆尽力せざるものなし、講武所蕃書調所を府下に設け海軍伝習を長崎に開くが如き、皆此人の建議経画する所なりといへり、安政四年合衆国公使と貿易章程を議定し、弁難論詰数旬に渉り、頗る我邦に利する所ありと、翌年條約を訂するの時に至り、異議紛然其不可を云ふ者多きを以て、政府頗る困却し、一日諸侯伯を営中に召し忠震に命じて時勢已むを得ざるの事情を縷述し、以て諭す所あらしめたりしに雄弁滔滔極て明暢剴切にして些の渋滞なりしかば、聴く者皆其処置の適當なるを認め、悦服して退きたりとなり、後外国奉行に任じ又作事奉行に転ず、儲式の議ありしとき、主として抗議建白する所ありしと云ふを以て嚴謹せられて閉居す、文久元年病に罹りて歿す、天若し仮すに数年の寿を以てせば再び登用せられて大に其驥足を伸べ、国家の為に尽すことあるべしとて人皆惋惜せざるものなしといへり。

その父設楽市左衛門貞丈。「日本博物誌年表」によれば、天保九(一八三八)年二月一日没。年五三。「一四〇〇石取の旗本で、名は貞丈、通称直之助・市左衛門、号妍芳、岩崎灌園の弟子。緒鞭会の有力メンバーで、前年は八回のうち七回に出席して会主も二度つとめており、その死は緒鞭会にとって痛手だったと思われる。また富山侯前田利保・福岡侯黒田斉清・幕医栗本丹洲らの書状交換による博物論議にも加わっていた。幕臣毛利梅園とも親しかった。刊行された著作は「蒲桃図説」だけである。「蒲桃図説」は「江戸科学古典叢書」に収録されている。原書は文政二(一八二九)年刊、栗本丹洲の前文と桂川国寧(甫賢)の後文がある。後年栗本瀬兵衛が岩瀬肥後守について書いたのはこのあたりの関係があると思われる。

緒鞭会の面々は、富山侯前田利保・福岡侯黒田斉清・幕医栗本丹洲・桂川国寧・田安侯家臣吉田正恭また馬場大助・武蔵石寿あるい

は田丸六蔵・佐藤兵三郎・浅香直光・飯室庄左衛門・関根雲停など。「武江産物誌」の著者岩崎灌園も馬場大助の紹介で参加をしていたとある。緒鞭会については、平野満「天保期の本草研究会」緒鞭会——前史と成立事情および活動実態(駿台史学九八)に詳しく、伊藤圭介「博物学起源沿革説統」に貞丈は絵が下手で会がある毎に岩瀬を連れて絵を描かせたとあると。田丸六蔵・飯室庄左衛門は妍芳設楽貞丈より手解きを受けたらしい。岩崎灌園は「本草図譜」を著し、栗本丹洲は「千虫譜」、武蔵石寿は「目八譜」、前田利保は「本草通串」をまた飯室庄左衛門は「虫譜図説」、馬場大助は「群英類從図譜」を。もう一人毛利梅園。「彩色江戸博物学集成」によれば「梅園画譜」に妍芳設楽貞丈からの標本の提供があったようだ。中田吉信「毛利梅園考」には梅園は幕臣三百石取り毛利元苗の子元寿であるとされている。嘉永四(一八五二)年五四歳で歿。

おわりに

設楽八三郎に拘って少しその周辺を見ることにした。幕末の慌しい時代の少し前に豊かな文化がそこにあり、幕臣といえども職務以外にいろいろな楽しみを持っていたという一端を見ることができた。

〔参考文献〕

- 『国書人名辞典』(岩波書店)
- 『明治維新人名辞典』(吉川弘文館)
- 『江戸文人辞典』(東京堂出版)
- 『寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会)
- 『寛政譜以降旗本家百科事典』(小川恭一編・東洋書林)
- 『江戸幕府役職武鑑編年集成』(深井雅海・藤實久美子編・東洋書林)
- 『国史大辞典』(吉川弘文館)

【新編武蔵風土記稿】(雄山閣)

【旧幕府】(戸川残花編・原書房)

【随筆百花苑】第七卷(森銑三編・中央公論社)

【甲子夜話】(松浦静山・東洋文庫・平凡社)

【編年江戸武鑑】文化武鑑・文政武鑑(監修石井良助・柏書房)

【大日本古文書・幕末外国関係文書】(東大出版会)

【江戸幕府代官史料・県令集覧】(村上直・荒井秀俊編・吉川弘文館)

【森銑三著作集】(中央公論社)

【江戸幕臣人名事典】(熊井保編・新人物往来社)

【江戸幕府旗本人名辞典】別巻(小川恭一編・原書房)

【江戸城下変遷絵図集・御府内沿革図書】(幕府普請奉行編・原書房)

【浅野梅堂】「乙骨耐軒」(坂口筑母・明石書房)

【紅葉山文庫と書物奉行】(森潤三郎・臨川書店)

【名家伝記資料集成】(森繁夫編・思文閣出版)

【詞華集日本漢詩】第四卷(七卷・一〇卷)(吸古書院)

【続日本随筆大成】四卷(吉川弘文館)

【永井玄蕃頭尚志 伝記】(城戸輝雄・私家版)

【幕領陣屋と代官支配】(近世史叢書四 西沢淳男・岩田書院)

【代官の日常生活】(講談社メチエ 西沢淳男)

【横浜開港の恩人岩瀬忠震】(森篤男・横浜歴史研究普及会)

【江戸】(大久保利謙編・立体社)

博物学関係

【白井光太郎著作集】(木村陽次郎編・科学書院)

【日本博物誌年表】(磯野直秀・平凡社)

【彩色江戸博物学集成】(平凡社)

【江戸科学古典叢書】四一・四四・四五卷(恒和出版)

【江戸の本草 薬物学と博物学】(矢部一郎・サイエンス社)

【菟沢公御随筆】(前田利保・桂書房)

【日本博物学史】(上野益三・平凡社)

【年表日本博物学史】(上野益三・八坂書房)

【江戸の動植物図 知られざる真写の世界】(朝日新聞社)

【殷様の生物学の系譜】(朝日新聞社)

【論文】

川合重雄「中世奥三河における設楽氏について」(「三河地域史研究」二)

川合重雄「設楽氏系譜考(続)」(「三河地域史研究」八)

夏目利美「八王子設楽家について」(新城市郷土研究会「郷土」一三五)

平野満「天保期の本草研究会」楮鞭会「前史と成立事情および活動実態」(「駿台史学」九八)

中田吉信「毛利梅園考」(「参考書誌研究」三〇)

磯野直秀「梅園画譜」とその周辺」(「参考書誌研究」四一)

磯野直秀「千虫譜」諸写本の比較」(「参考書誌研究」四四)

【WEB】

①私設電子図書館佐奈川文庫新館(越後長岡と東三河)

<http://www43.tok2.com/home/oshinamud>

②みいはあ版平成伊達家記録別館(八世宗遠公の子孫血統表)

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/omeas>

③幕臣Info(米田桂次郎)

<http://www.bakusin.info/main/jinbutu/index.html>

④ひ孫が紹介する トミー 立石斧次郎

<http://plaza28.mbn.or.jp/%7Ehowdyfrommy/index.htm>